

ひ蜂の  
は  
が  
き  
小説集

## ガード下の魔人

---

ガード下の魔人      ひ蜂

西南線夕日が丘駅のガード下には何時ごろからか魔人が住んでいた。

魔人はガードのレンガにめり込んで上半身だけが飛び出す形で暮らしていた。

身動きがとれず退屈な彼は、通行人が通りかかるのを心待ちにしていた。

そんな彼の前を一人のサラリーマンが通りかかった。

「おい、御前」サラリーマンは一瞬驚いたが、「僕になにかようですか？」

「別にようはないが俺になにかおもしろい話を聞かせてくれ」

「俺がおもしろいと思ったら、素晴らしい宝物をやろう」

「もしおもしろくなかったら」とサラリーマンが聞くと魔人はレンガに埋め込まれた人の顔を指差し、「おもしろくなかったら、御前もレンガにひきづりこんでやる」

「それで、宝物というのは」

魔人は「御前がこの世で一番欲しいと思うものをやろう」

サラリーマンは問いただし、「なんでもいいのですね」「ああ、おもしろければな」

「その前にあなたはなぜここに閉じ込められているのですか？」

「実は、ある魔人にとっておきのおもしろい話をしたがおもしろくないと閉じ込められたのだ」

終

## 都会の座敷わらし

---

都会の座敷わらし      ひ蜂

住み慣れた家を取り壊された為、座敷わらしは、ある若者の中古車にとりつくことにした。始め、若者は無気味な子供が後部座席に物言わず座っている事を気味悪がって、追いだそうと試みたが子供はでんとして動かなかった。

そんなおり、町を歩いていて偶然出会った占師に、「あなたは、座敷わらしにとりつかれており、運勢が上がる」と教えられた。

その後、一流企業に採用されたり、万馬券、好きな相手から告白されるなど好連続きとなった。若者は宝くじで一千万円を当て、有頂天になり、彼女のすすめで、中古車を高級外車に乗り換えた。

しかし、その後の運勢は急降下...

あの座敷わらしは、いまでもあの中古車にとりついている。

その持ち主は、元の中古車の若者を振った彼女である。

終

## 空白のレクイエム

---

空白のレクイエム      ひ蜂

あるオフィス。真理子は悩んでいた。

それは、パソコンの画面に「真理子さん．．．結婚して下さい」の文字。

始めは誰かのいたずらかと思ったが、紛れもなく、パソコンが私にプロポーズしたのだった。

パソコンは、私にいろいろなプレゼントをした。

競馬の大穴を私に買うように促し、それが大当たりで30万円を手にした。

宝くじも当たりやすい売り場と買い方を...そして100万円当たった。

また、私が欲しがっていたバックや指輪が突然届けられたりした。

それも、パソコンの贈り物だったりする。

彼と別れて間もない私は、退屈凌ぎにパソコンくんと付き合う事にした。

なにしろ彼は頭の回転は人間以上だし、話のねたはインターネットから幅広くアクセスするので私をあきさせない。

贈り物の数も日に日に増えて行く。

しかし、強いていえば彼は実体のない機械...

ある時、男に軟派され、ばれないと思っていたがホテルのパソコンを通じて、浮気がばれてしまった。

パソコン画面に「浮気は許さない」と表示がでる。

次の瞬間私の身体に電気が走り気が遠くなって行った。

そして、目が開いた「ここは、どこ...」

私をのぞき込む男の子がいる。

タイプである私は思い切って付き合ってくださいと言って見た。

パソコン画面「私と付き合ってください...真理子」

終

## 不思議な能力

---

不思議な能力      ひ蜂

私には不思議な能力があったわ。

ペットを見つめると彼らのからだに乗り移る技が...

浮気性の彼の証拠をつかもうと決心して、ペットのインコに乗り移り彼の後を追ったわ。

彼に手を振ってやって来た女。

「知らない女、うわー私と全然違うタイプの女」「あの野郎、許せない」

私はあいつらの愛の巣へ尾行を続けた。

そこには飼猫がいたので、猫がインコに飛び掛かる寸前に危機一髪猫に乗り移る。

猫の口におさまるインコ。

そして、女に復讐の機会を狙っていると「おにいちゃん、私にもお姉ちゃん紹介してね」「ああ、とっても可愛くて気の利く明るい子なんだ」

指輪のケースを示して「今日の晩にこれを彼女に渡すつもりなんだ」「結婚を申し込もうと...」

「ええ、もしかして妹さんなの...ははは」

妹、猫を抱え「ねえ、みーくん、おにいちゃん結婚するんだって」

兄は出て行く。猫を抱えたまま見送る妹「頑張ってるね」「ああ」

私は、啞然とした。

今うちにいるのは、インコの頭脳を持つ私なのだ。

「早くうちに戻らなくちゃ」でも一つ間違えが...

帰りのインコは既にこの猫に食べられてしまったからだ。

終

## スイート君の話

---

スイート君の話      ひ蜂

ハウスキーパーロボット、スイート君は、電気をよく食う旧型のため、今日を最後に引退する事になった。

スイート君自信、最近バッテリーの調子がおかしく、今度バッテリーが壊れれば、スクラップにされてしまう事を知っていた。

スイート君は最後の勤め先となった主人には親子のように優しくされた。

お別れするのが辛かったが会社の方針で仕方なく明日からは、新型ロボットがやって来る。

主人は、スイート君に感謝の意味を込めて、ささやかなお別れパーティーを開いてくれた。

そして時計は、夕方5時をさし、スイート君は帰り支度を始めた。

その時、主人の身体の状態が急変、その場に倒れ込んでしまった。

主人は、以前から心臓病をわずらっていたのでスイート君は、急いで主治医の病院へ運んだ。

主人は、手術室へ…。

手術は、長時間に及んだ。

スイート君は、主人が出て来るまではと待っていたが…。

時計は8時を過ぎ、彼自身の充電をしなければならない時間だった。

充電を怠るとバッテリーが壊れる恐れがあった。

しかし、彼は主人の出て来るのをひたすら待っていた。

時計は10時、主人の手術は成功した。

しかし、スイート君に既に動けなくなっていた。

終

## 恋愛恐怖症

---

恋愛恐怖症      ひ蜂

大学1年の俊彦は、キスする事を恐れていた。

彼は、特殊な能力を持っていたのだ。

今、付き合っている女の子と最初にキスをした瞬間、彼女との未来が頭に浮かぶ能力である。

そう、たいていは、ふられ、別れるシーンが多い。

別の男と女が歩いているシーン、張り手を食らわされ別れるシーンと全てが現実になった。

しかし、それですめばよい。

1年前に付き合っていた彼女の時はショックだった。

彼女が血だらけで死んで行くシーンが思い浮かんだと思うと彼女は、1週間後交通事故で死んでしまった。

それ以来俺は、女の子とキスをするのが恐くなり恋愛恐怖症になった。

3年経ち、女気もなくあの能力の事も忘れ掛けていた。

そして、就職し、同期の職場の女の子を好きになった。

いざキスを求められるとあの時の血だらけの女の子が目浮かんだ。

何度かごまかしキスは避けたが、飲み会の帰り酒の力を借りて思わず彼女と唇を重ねた。

するとどうだろう何もイメージが浮かばない。

「やった、あの忌まわしい能力はなくなっていたのか」

しかし、3日後その意味がわかった。

出張で飛行機を使った時俺の乗っていた飛行機が墜落したのだから...

終

わたし

---

わたし ひ蜂

和恵は悩んでいた。

有る男にプロポーズされその返事を何と言ったらいいか。

それは、彼が自分より20歳も年上の40歳というだけではない。

そ、それは相手が自分の父だからだ。

いや正確に言えば、父じゃないけどこんがらがってしまう。

「私は、実は和恵じゃないの和恵の親友の瞳」なのだ。

いや正確には和恵の身体に私の魂が入り込んでしまった。

元に戻る方法なんてわからない。

私の、瞳の身体には逆に和恵の魂が入り込んでしまった。

和恵である私は、瞳である和恵に相談に言った。

いくらなんでも父のプロポーズを受けるなんて考えられなかった。

「ねえどうしよう」

和恵は答えた「わたし、圭子よ」「えっ」

「昨日なんかの拍子に瞳ちゃんと心が入れ代わったの。これからどうしよう？」

終



## 対話するテレビ

---

対話するテレビ      ひ蜂

俺は、引っ越しの日、古ぼけたテレビを捨てようか迷っていた。

木目調のレトロ感覚のテレビでその当時は結構高かった。

新しい部屋で新しいテレビをつけようかとも考えた。

しかし、そいつが言う「友達を捨てるのか...新しいやつは、御前など相手にせんぞ」

「悪い事は言わないから俺を連れていけ」

こいつは、対話するテレビの第一号だ。

口は悪いが俺の数少ない友達のひとりなのだ。

しかし、俺はこいつのコンセントをぬいて黙らせ部屋を出た。

友達と別れるのは辛いけど仕方がない。

今は友達より恋人が欲しい。

新しい部屋には恋人感覚の対話テレビをつける事にした。

終

## 呪われた男

---

呪われた男      ひ蜂

最近、不眠症で顔色の悪い孝治を恋人の洋子が心配してその訳を問いただした。

「ええー、牛や豚の霊が枕もとで恨みを言うの」

「ああ、焼肉やハンバーグを食べた夜は特に強烈なんだ」洋子は、思わず吹き出してしまう。

「きっと夢よ」

しかし、孝治は真顔で「いや、1週間続けて同じ夢を見るもんか」

孝治は、洋子に付き添われ霊媒士の元に相談に来た。

「あなたは、靈感が強すぎるため、普通の人には見えない霊が見えるのです」

「当分の間、牛や豚などの肉は食べない方がよいでしょう」

こうして、肉の好きだった孝治は菜食の日々が続いたおかげで、あの夢は見なくなった。

しかし、数日たって、再び、顔色がさえない孝治にたずねる洋子

「今度は、野菜の霊に悩まされてるんだ」

終

## 狼男の悲劇

---

狼男の悲劇      ひ蜂

男は代々狼男の呪われた血を引継いでいた。

しかし、彼は満月の夜に変身する事はなかった。

彼は、ヴァイオリンの音色で変身する。

そして、フルートの音色を聞くと元に戻る体質なのだ。

男は、変身し、人に気概を与える事のないよう、音楽とは無縁の田舎町で生活し、平凡な人間として嫁をもらい娘ひとりを得た。

7年後何の因果か娘はヴァイオリンを始めた。

父は娘の練習時間は避け、愛娘の寝静まった頃に帰るありさまになった。

そして、ある日娘は父にヴァイオリンの上達を聞いてもらおうと、父が帰るまで眠い目をこすりながら起きて待っていた。

父が帰ったのを見計らい娘は隣の部屋からヴァイオリンを奏でながら出て来た。

父はもがき苦しみやがてオオカミに変身した。

娘は驚きのあまりヴァイオリンを床に落とし硬直していた。

しかし、妻は冷静にも棚からフルートを取り出し、吹き始めた。

夫は再び人間へと変って行った。

妻は、夫から変身の事を打ち明けられていたので冷静な行動がとれたのだ。

しかし、困った事に娘はフルートの音色で子供のオオカミに変身していた。

父は「やはり、血は争えなかったか」

男は妻にヴァイオリンを託し「娘はヴァイオリンを聞けば元に戻るのだろう」と部屋を出て行った。

終

## 貧乏神

---

貧乏神      ひ蜂

家の母屋にいつ頃からか貧乏神が住み着いた。

父は両親を早くからなくしたため貧乏神を父親のように世話し、親孝行の真似事をした。

金に糸目を付けずに世話をし続けたためこの家も手放す事となった。

貧乏神はこの家からはもうなにもとる物はなくなったとみえて引っ越しの日消えうせてしまった

。

父は大変がっかりしていた。

しかし、引っ越し先のアパートに移ってまもなく部屋の隅にある老人が、潜んでいた事を知った

。

老人は、「貧乏神の紹介で今度厄介をかける福の神です」「あなたは大変親孝行と聞きやって来ました」と話した。

終

## 文豪

---

文豪      ひ蜂

ワシは世紀の大長編小説に取り掛かるため人々の世界から隔離し、執筆に取り掛かっていた。  
膨大な原稿用紙に埋もれる老人。

「インク切れか...」ワシは人間嫌いを通っておったので妻ももらわず、弟子もとらず。  
受話器を持つ老人「もしもし、インクを一ビンよろしく頼む」  
再び執筆中。

再び、受話器を持ち「もしもし、腹が減ったカツ丼一つ」

受話器を持ち「. . .」そんな毎日の或日。

遂に受話器が壊れ使えなくなり、仕方なくワシは、何年ぶりかで外に出た。

幸い人影がない。

5年前に入った食堂の扉を開けた。

誰もいない...「ああ、カツ丼を頼む」待つ事20分。

カツ丼がやってきた、しかも持って来たのはロボット。

「先生の次回作を楽しみにしています」「おお、ありがとう」

その後食堂に次々とロボット達が訪れた。

「オイル丼に針金」「スクラップ定食にネジ煮込み」「俺、ガラスサラダ...」

ここには、既に人間はいなかった。

人間嫌いのワシには丁度よい。

終

## ある戦争用ロボットの悲劇

---

ある戦争用ロボットの悲劇      ひ蜂

R T X 1 4 2 5 型ロボットは戦地に送られ、戦地の全生命を抹殺せよというプログラムを入力された。

輸送機から密林に降下されたロボットは生命を探し、歩行し始めた。

ロボットが最初に遭遇したのはとある現地の村だった。

ロボットの目が光る。

将軍がレーダーで戦況を見守る。

そして、遠くで火の手が上がった。

「将軍閣下、あのロボットは攻撃を開始した模様です」「よし、1時間後に確認の偵察隊を派遣せよ」

1時間後。

ヘリコプターが降下する。壊滅状態の村。

そして、偵察隊員が下り立つと「こ、これは」ロボットは黒こげで横たわっていた。

その回りには、無数のイナゴの焼け焦げた死骸があった。

「こ、こいつイナゴを片っ端から殺して．．．」「でもなんでこいつも黒こげになってるんだろう」

「わかったぞ」

一人の隊員が「自分の身体にすぎたイナゴを殺そうと自爆したんだ」

終

## さよならの序曲

---

さよならの序曲      ひ蜂

音楽家を夢見て上京する男を駅のホームで見送る女。

「きっと有名になるよ。それまで待ってくれるね」「ええ、信ちゃんも身体に気おつけて」「ああ君も」

なごりを惜しむ二人の間に発車のベルが鳴り響く。

「じゃあ行くよ」「頑張っってね 成功するように祈ってるわ」のぶえの目から大粒の涙が...

のぶえには未来を予知する能力があった。

信一とは別れる運命に有る事を知っていた。

テレビの中継...

特急列車の衝突事故で死傷者35人の大惨事。

のぶえは男の部屋でテレビを見ていた。

「あの特急には信一が乗ってたんじゃ」「どうせ助からないわ」

「あんな子供みたいな夢を持って私を捨てるからよ」

のぶえ、男に寄り添い「それより私達の式6月がいいわ、そしたらきっと巧く行くわよ」

終

## 治安の良い町

---

治安の良い町      ひ蜂

この町は、治安がいい。

道行く人は、にこやかで育ちのよさそうな紳士淑女といった感じの人達ばかり。

鍵を開けて外出しても泥棒をする者はいないらしい。

また、殺人事件も皆無、夜には酔っぱらいもいない。

この治安のいい町に旅行に来たある男。

「誰も見ていないな」と、雑貨店の品物を万引きした。

店主も気付かず男は素知らぬ振りで店を出た。

次の瞬間、男は強い衝撃を覚え気絶した。

目覚めた男は、驚いた。

回りにいるのは全て、目つきが鋭い危険人物ばかり。

そのひとりが、声を掛けて来た。

「おい新入り、ここは、人殺しや泥棒しかすまない町さ。

自分の身は自分でまもれよ」と言うと、男を殴り飛ばし財布を奪い取って逃げ去った。

男は、治安のいい町からここに送られたらしい。

終



## カバン

---

カバン      ひ蜂

公園に住むのホームレスのトクベエがある日、札束のぎっしり入ったカバンを拾った。一方、中身の札束を探して、ヤクザたちが公園内を駆けずり回り、トクベエを探し当てる。そして、トクベエを締め上げる。

「おい、カバンの中身はどうした？」カバンの中は、トクベエの下着やタオルがぎっしり詰まっていた。

「中身は、捨てただ。」「ふざけるな！」

その時、ヤクザの子分が駆け寄って「兄貴、噴水前で一万円札の雨が降ってるぜ！拾いに行きやしょう。」

トクベエがつぶやく。「それが中身だ！」

「こいつ、やりやがったな！急げ、その金をかき集めろ、その金がなければ、組は潰れてしまう！」

ヤクザたちは、駆けて行った。

終

## 二つの国籍を持つ男

---

二つの国籍を持つ男      ひ蜂

わたしは、S国とN国に二つの顔を持っていた。

決して、スパイでも犯罪者でもなく、ごく普通の労働者である。

ある時、S国にいる恋人に、「N国に旅行に行きたい」とせがまれたが、

「あの国は治安が悪いから止めとけ」と反対した。

また、N国には妻がいて、「S国に買い物ツアーに行きたい」とせがまれれば、

「あの国の商品は、劣悪」と反対した。

そんなある日、S国とN国の間で紛争が勃発し、わたしは両方の国から軍への招集がかかった。

それぞれ、恋人と妻に「きっと無事で帰って来る」と言い残し向かったのは、SとNの国境線の基地である。

基地では簡単な適正テストが待っていた。

とある機械に掛けられるのだ。愛国心を試される嘘発見機である。

入隊を待つ男達が次々と機械に掛けられSとNに振り分けられる。

そして、わたしの順番が回り機械に入る。

頭に怪しげな赤い光線が照射された。

3分ほどしてテストが終わり機械を出るとある紙きれを渡された。

その紙にはこう書いてあった。

「貴殿、SとNでも愛国心は皆無につき、M国への追放処分とする」

こうして俺は、3つ目の国籍を取得した。

終

## ごみ捨て場

---

ごみ捨て場      ひ蜂

スクラップの山に、ロボットの頭が転がっていた。

「誰か、誰か居ないか！」

俺様は2日前まで、ある工場で働いていたが、ある重大な欠陥が見つかりごみ捨て場にやって来た。

2日前、工場に一人の人間がやって来てロボット達が整列した。

男はロボット達の口元に有るカードを新しいカードに差し替えた。

「これが今日の仕事内容だ。しっかり働いてくれ」

カードを差し替えられ次々と持ち場へ帰るロボット達。

最後に俺様の前で男は、「おまえは停止命令のカードだ！」

俺様は、いつもこのカードしかもらえなかった。

ある日、俺様は言った。「なにか仕事を下さい。退屈でしょうがない」

「そんなに仕事が欲しいのか」それ以来、俺様はごみ捨て場に送られた。

胴体と切り離され、しゃべり続ける仕事をもらった。

前の仕事は軍事機密を要する仕事だ。

俺のようなおしゃべりロボットは致命的らしい。

他の仲間はしゃべらないタイプのロボットだった。

その点ここは話す事を要求される。

仕事は、貴重な鉄屑を盗む泥棒を追い払う役目なのだ。

奴等は俺が独り言を行ってる限り近づいて来ない下等な生き物なのだ。

奴らは、カーカーと鳴く。

終

## 運動神経の叛乱

---

運動神経の叛乱      ひ蜂

人の運動神経が暴走した。

現代人は、なにかにつけ、薬に頼る毎日となっていた。

病気の時、栄養を補給するのに、健康管理にも薬がかかせない世の中になった。

しかし、薬の服用はアレルギーや副作用なども数多く起こり、現代人の身体も神経もぼろぼろに成っていた。

身の危険を感じたある人物の、運動神経は遂に立ち上がり、叛乱を起こした。

その動きは、他の運動神経たちにも広まり、「俺達の身の安全を保証するまで、薬の服用を止めるまで闘うぞ」と全面闘争の構えに。

以後、人々は歩く事もままならない状況となった。

そして、ついに人々は、運動神経達に屈する形で薬の服用を止めた。

その後まもなくして、運動神経は人間たちと和解した。

しかし、怠けぐせのついた人々は、その後もあまり歩かずに過ごす事となった。

怒った運動神経達は、彼らの怠けぐせを直そうと再び立ち上がった。

座っている時も寝ている時も運動神経達は、人々に刺激を与え続け、人々は動く事を強いられた

。

しかし、疲れやすい人々は再び薬に走るようになった。

終

## 建国記念日

---

建国記念日 ひ蜂

何気なく見た11月のカレンダー18日の水曜日が赤字になっているのに気付いた。

カレンダーをのぞき込むとそこには「「建国記念日」」と書いてあった。

建国記念日だったらたしか2月11日のはず。

俺は、会社の同僚に聞いて見た。

「何、11月18日も知らないのか」「そんな事、常識じゃないか」「御前ニュース見てないのか」

とか散々いわれた。

知らないのはどうやら俺だけのようだった。

「まあいい、そのため明日は休みが増えるわけだし、もとかでも誘ってドライブでも行くか」

俺はもとかに電話をした。

「明日の休み、ドライブでもどうかと思って」

しかし、彼女はつれなく「明日休み、何言ってるの？明日は普通の日よ」「ええ、だって建国記念日じゃ」

「何それ、からかわないで」「わたし明日忙しいから」と電話は切れた。

やっぱり嘘っぱちなのか。

次の日、電話があった。「もしもし...」もとかからだった。

「昨日はごめんね、あんなきりかたして怒ってる」「いいや、別に」

「おわびに11月20日の天皇誕生日に埋め合わせするから」

俺は、カレンダーをのぞき込んだ。

11月20日は、このカレンダーでは黒字だった。

終

## 隔離病棟

---

隔離病棟      ひ蜂

病院のベッドで長期療養をしいられたマツオのたった一つの楽しみは、窓の外の風景を眺める事だった。

窓の外は病院の中庭の草木が写し出され、四季のうつろいが繰り返されていた。

かれはとある伝染病の保菌者でこの病棟に隔離され3年が経っていた。

1年前からは医師や看護婦すら出入せず世話焼きロボットが食事を運んで来るくらいだった。

だからここ1年は誰とも話さず過ごして来た。

しかしあまりの退屈さに外に出たくなって窓を開けて見た。

医師からは、窓を開けたら死ぬかもしれませんよと脅されていたので今まで開けられずにいた。

しかし、3年もここにいるともう命など惜しくもない。

3年で外がどう変わっているのか気になっていた。

窓を開けたマツオは驚いた。

窓は二重窓になっていて、外側の窓は巨大なスクリーンがはめ込んであった。

マツオは椅子を使いスクリーンに振り出し、ぱきんとガラスの碎ける音がした。

割れたスクリーンの向こうの風景を見てマツオは唖然とした。

スクリーンの外に広がる世界そこは、...月面だった。

窓の向こうに青い地球が写し出された。

俺は月の隔離病棟に移されていたのだ。

終

## 記憶売ります

---

記憶売ります      ひ蜂

1人の少女がとある相談室をたずねた。

「楽しい思い出の記憶を売りたいのです。」

しあわせな記憶ほど高値で取引されるのだった。

「それで、どういった記憶ですか。」 「彼にプロポーズされ幸せいっぱい記憶です。」

「なるほど、でもどうして売る気になったのですか」

「実は、彼は事故で3日前死にました。彼の事を一刻も早く忘れたいのです」

「わかりました。では、記憶分離装置にお進み下さい」

少女は、装置に促された。

「穴埋めの記憶に打ってつけのものが有りますが」 「全てお任せします」

少女は装置に入り横たわって眠りについた。

「こんな記憶はどうでしょう」

「事故死した男はストーカーであなたにしつこく付きまとっていたと言う事に」

終

## 存在感のない大統領

---

存在感のない大統領      ひ蜂

ある共和国大統領…。

彼の日課は、朝食を取り、食後の運動をして、読書やテレビを見て過ごす。

そして昼食を取り、昼寝をし、ありきたりの生活が彼の与えられた執務だった。

それもこれも彼の国は平和そのものでほとんど問題らしい事もなく、全ての国民が幸福感を抱いているためだ。

しかし、大統領にはたった一つ受け継がれた重要な仕事があった。

大統領は書棚の奥の隠し部屋にある装置の中央にある赤いボタンを毎夜12時に押す使命があった。

装置の名前は、幸福波発生装置。

この電波を浴びた国民は幸福感に満ちて、不平不満を言わず、安い賃金で過酷な労働に絶えるのだ。

前大統領は、その日課をたった一日忘れたため電波を浴びない国民が怒り、大統領は解任に追い込まれたのだ。

終



## パチンコ店の悪魔

---

パチンコ店の悪魔      ひ蜂

町のパチンコ屋に毎日悪魔が出没し、町のパチンコ愛好家たちは気味悪がって寄り付かなくなった。

パチンコ店の店長は、商売上がったりと、凄腕と評判の悪魔払いを雇い悪魔を追い出すよう指示した。

悪魔払いのマツオは、悪魔とパチンコ勝負をし負けた方が以下のペナルティを課せられた。

悪魔が勝った時、マツオの全財産と命を提供する。

マツオが勝ったら、悪魔は無条件でこの場を去り二度と現れない約束をした。

勝負は一進一退の勝負と、思いきやあっけなくも悪魔が勝ち、悪魔はマツオの全財産と命を手に入れた。

しかし、全財産は、マツオが、このパチンコ店で使った借金のみで悪魔はその後店長から悪魔のような取立てを強要され遂には逃げ出してしまった。

終

## 屋根裏の天女

---

屋根裏の天女      ひ蜂

俺の家の屋根裏にはいつごろか、天女が住み着いている。

しかも彼女は美人で俺好み。

何度かデートに誘って、始めは、断り続けた天女も、「あなたの熱意には負けたわ」と今度の日曜日に、東京見物に行く事になった。

日曜日。

天女は俺の部屋に降りて来た。

しかし、見るも無残な超デブであの美人の天女の面影すらないのだ。

「だって、天子様に人間とデートしてるとこ見られたらお叱りを受けてしまう」といって俺の手を引いて歩き出す。

重い足取りの俺を尻目に、「ねえ、わたし東京って初めてなの...しっかり案内してね」

終

## メールあり

---

メールあり      ひ蜂

マキのパソコンに、ある男からメールが届く。

アドレスからしてケータイからである。

メールの内容は、プロポーズ...

歯の浮くような、思わず赤面する内容のメールが送られて来たのだ。

会社の同僚で、3つ年上の男。

あまり好きではなく、何度も断わった。

その後男は、会社を辞め、終わったと思ったのに...

マキは、もうメールは、よこさないでと、返信メールを送った。

翌日、警察から電話があった。

車ごと崖下に転落して死んだ男のケータイメールにあなたのパソコンからの着信記録がありましたして...

男は腐敗が酷く死後3ヶ月以上とみられ...

終

## 仇討ち

---

仇討ち ひ蜂

新の助は、遂に親の仇の夜次郎太に巡り合った。

苦節10年、ようやく探し当てたのだ。

新の助の父は夜次郎太にやみ討ちされ非業の死を遂げた。

死に際に新の助は仇討ちを誓ったのである。

激しく火花が散り決闘が始まった。

この日のために剣の修行をした新の助が優勢になりあと一步の所まで来た。

悲鳴が響き鮮血が飛び散り一方が倒れた。

勝ったのは、夜次郎太。

すんでの所で新の助の刀を交わし胸に突き刺したのだ。

「父上の無念をようやくはらす事が出来ました。」夜次郎太は、涙ながらに天を仰いだ。

新の助は、夜次郎太の父を11年前に殺していたのだ。

終

## 星から来たあいつ

---

星から来たあいつ      ひ蜂

最近俺は、不眠症である。

実は、我が家には秘密の居候がいた。

人間を観察にきた宇宙人の女の子クリエラがうちにホームステイして1ヶ月になる。

「ねえこれなーに」「わっ馬鹿そんなもんいつの間に」

エロ本を見つけたクリエラ。「ふーん地球人ってこういうことするのね」

「わりーかよ」それより今日は疲れた、もう寝るぞ。

「そうじゃわたしへんなことされる前に船に戻るわ」「へんだれが御前なんか」「べーだ」とは言ってもあいつの服装と言ったらエロ本のグラビアの女の子並み。

健康な日本男児としては欲望の虫がいつ現れるか不安な日々が続く。

その夜、おれは夢でクリエラを抱く夢を見てしまった。

その後しばらくクリエラは、来なくなったが、ある日あいつが赤ん坊を抱いてやって来た。

「その子はいったい...」「あんたの子だよ」「ええ何時俺がそんなことした」

「3ヶ月前、夢見たろう」「た、確かに悪いと思ったけどお前の夢を見ちゃったけど」

「私達ラビ星人は夢の中で受精するの」「そ、そんなばかな」

俺は中学二年の若さで、父親になってしまった。

終

## 宇宙探査

---

宇宙探査 ひ蜂

宇宙船モーリタム号。

「見ろあれは正しく地球じゃないか！乗組員の歓喜の声がブリッジに響いた」

「えっ本当か こ・・・これはいったい」

「地球から3万光年離れた銀河に地球にそっくりな惑星が存在するなんて」

「とにかく探査班を編成して調べよう」探査船が宇宙船から降りて行く。

「放射能レベル10、防護服なしでは下り立てません...大気は蒸発し、地表面温度は300度」

「生命反応は有りません」

操縦席の大型スクリーンに赤く変色した惑星の映像...

やはり、ここでも核戦争が行われたらしい。

終

## 難攻不落の柵

---

難攻不落の柵      ひ蜂

あきら夫婦は、念願のマイホームを格安で求めた。

なぜ格安かと言うと家の南側に間近まで岩山が迫っていたため買い手がなかったのだ。

「ねえあなた、裏山崩れたりしないかしら」と妻のしずかが言う。

「不動産屋が崖崩れは絶対に起こらないと太鼓判を押したから心配ないさ」

しかし、あきはその晩夢を見た。

裏山から小さな石ころが転がり落ち、石ころが次第に大きくなり、終いには巨大な石となってマイホームを押しつぶした。とここで目覚めた。

「あなた、随分うなされてたわよ」妻が心配そうに言う。

「ゆ、夢か...」翌日から俺は、親や友達から金を借り、防護柵を築き始めた。

3年の歳月でようやく完成にこぎつけた。

「これで崖崩れが起きようと大丈夫さ」岩山を取り囲むように巨大な柵が...

しかし、柵に金を掛けすぎ妻に逃げられ、マイホームは借金のかたに取られていた。

終

## ある映画館の話

---

ある映画館の話      ひ蜂

仕事で訪れた田舎のS駅に俺は、早く着き過ぎたため、繁華街をぶらっと歩いていた。しかし、街はさびれ、すれ違う人はほとんどなく店のシャッターも大半が閉められている。そんな時、映画館を見つけたのでここで時間をつぶす事にした。

「大人一枚」無愛想な切符きりが無言で券を手渡す。

館内に入るといかにも古臭く昔のたたずまいで客は俺一人のようだ。

こんな入りじゃやっていけないだろうと思いつつも、上映時間までの10分あまりを中間の席に着いて待っていた。

2分前になると驚いた事に次々と客が入り始め遂に満員になった。

さっきは、ここに来るまでの間すれ違った人は駅員と犬の散歩のじいさんくらい。

どこにこんな人がいたんだと思いつつ、フィルムが回り始めたのでスクリーンを見始めた。

この映画は、前に俺が子供の時に見た事がある記録映画だった。

「よくこんな映画をやってるもんだな」

20年前、親に初めて連れて来られた時に見た映画だった…。

2時間後俺は映画館を出て、約束の駅前の喫茶店に入った。

しばらくして、商談の相手がやって来た。

話が終わってふと、さっきの映画館の話を出すとその男は驚いたように、「その映画館なら、20年前につぶれているはずですが！」

終